



日本百名山

弁護士
(元検事総長)

大野恒太郎

少年時代から山を歩いているので、山歴は既に六十年を超える。

近年つくづく感じることは、山を歩く人に百名山志向が強いことである。日本百名山は、作家深田久弥が山の品格、歴史、個性を基準に自ら登った山の中から選定したもので、昭和三十年代に雑誌に記事が連載され、その後単行本等として版を重ねている。山好きの人達は、自分はそのうちの何座に登ったとか、次はどこを目指すなど、百名山について語る事が多く、深田の著書は半ばバイブルのような扱いを受けている。また、百名山をテーマにした番組や書籍も少なくない。一私人による選定が、社会的にここまで受容されて定着したことには驚くほかないが、それはこのリストが日本全国をカバーし、大方の了解を得るに足りるだけの妥当性を備えているからであろう。私も5歳で両親に連れられて登った霧ヶ峰に始まり61歳で妻と登った利尻岳まで実に56年をかけて百名山を完登した。

百名山は、何よりも、多くの人達を山に誘い、日本各地の多様な山々を知る手がかりを提供したという点において、その功績は大きい。深田の文章は、それぞれの山につき2,000字程度の簡潔なものであるが、自分が登った時の思い出をベースにしなが、その山の自然や文化、歴史等にも及ぶことから、山歩きという営為の持つ奥深さについて改めて認識させられるのである。

もっとも、百名山ブームには、マイナス面もあると思う。一つは、百名山に全国からの登山者が集中してあまりにも混雑するようになったことである。

百名山の中には人気（ひとけ）がなく太古の自然のままであることを理由に選定された山も含まれているのであるが、登山者が列をなすような状況が山の本来の雰囲気や損なっていることは否定し難い。また、多くの人が百名山の完登を目的にすると、その需要を当て込んだ商業登山が繁盛し、できるだけ短時間で効率良く山頂に達するような数稼ぎがまかり通るようになる。私のようにじっくりと山を味わいたい者としては、こうした登り方に対してはいささかの違和感がある。

もっとも、山の愉しみ方は人それぞれであろう。そして、百名山をきっかけに山の魅力に目覚めた人達が、いずれ自分なりのやり方で好きな山を歩くようになれば、それは素晴らしいことであり、山を愛した深田の心情にも沿うことになると思うのである。

